

幼児と高齢者の交流活動に関する研究(1)

—A幼老複合施設での歌を用いた事例から—

A Study of Child and Senior Citizen Exchange Activities (1)

—From a Case of Exchange Activities with Singing in Compound Welfare Facility A—

連 桃季恵 (人間科学部こども学科助教)

Tokie MURAJI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Assistant Professor)

〈要旨〉

本研究は、2016年9月20日に行われた、福井県あわら市にあるA幼老複合施設(併設)での幼児と高齢者の交流活動における“歌を用いた披露型交流”と“わらべ歌を用いた手合わせによる交流”活動の事例を通して、より効果的な交流方法を検討することを目的とした。そのために、幼児と高齢者の交流活動の観察調査と共にA幼老複合施設職員への質問紙調査を行った。その結果、歌を用いた披露型交流では、高齢者は積極的に手拍子をして歌っており、その場に能動的にかかわることによって、幼児と高齢者が共に楽しむ雰囲気を作られていた。また手合わせによる触れ合い交流では、高齢者は幼児と主体的且つ積極的にかかわる様子が見られたが、高齢者とのかかわりに慣れていない幼児の中には戸惑っている様子も見られた。これらを踏まえ、幼児と高齢者の交流活動の中に歌を取り入れることの利点や留意点に関して考察した。

〈キーワード〉

世代間交流, 幼児, 高齢者, 歌

1 問題と目的

生活スタイルが多様化し、子どもの日常生活の中で高齢者とかかわる機会が減少している。1997年中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、高齢化が急速に進展する中で、子どもが高齢者との触れ合いを通して、「生の尊厳」「老い」や「死」ということの重さを学び、高齢者をいたわり思いやる気持ちなどを育ていく重要性を強調している。このような流れを受けて、保育所・幼稚園等では、子どもと高齢者がかかわりをもつ活動が行事の中に取り入れられ、また老人福祉施設においても、子どもとの交流が拡大・浸透してきている(菅谷, 2014)。

幼児と高齢者の世代間交流を実施する頻度は年に1・2回や数回が最も多く、その活動形態は“幼児たちの歌や遊戯等を高齢者が観賞する”形態が最も多いことが報告されている(關戸, 2006)。つまり、多くの交流活動はイベント的な行事として行われ、且つあまり触れ合いをもたない幼児からの一方向的な披露型交流であることがうかがえる。

また、歌などの披露型交流は、子どもにとって印象に残

りやすく(上村・岡花・若林・松井・七木田, 2007)、高齢者からも希望がある活動形態であることが分かっている(下村美・下村一, 2009)。しかし、世代間交流は日常生活の中での自然なかかわりがよい効果を与えるとされ(立松, 2008)、会話の多様性や接触回数が共感性の発達に影響することなどが示されており(村山, 2009)、イベント的な披露型交流だけでは十分な交流とは言い難い。確かに、披露型交流は身体接触を伴う活動ではなく、会話などのやり取りもほとんどないことが多い。しかし、子どもが歌などを披露する交流活動においては、披露する側の子どもと披露される側の高齢者に自然な相互作用が生じるのではないだろうか。

そこで本研究は、福井県あわら市にあるA幼老複合施設(併設)において、幼児と高齢者の交流活動で用いられた“歌を用いた披露型交流”と、続けて行われた“わらべ歌を用いた手合わせによる触れ合い交流”の事例から、その実態と課題を把握し、一見イベント的で披露型の交流活動であっても豊かな交流が生まれる可能性を指摘し、さらにより効果的な交流方法を検討することを目的とする。

2 研究方法

2-1 調査対象

福井県あわら市にある認定こども園と高齢者施設（小規模多機能居宅介護施設）が併設されたA幼老複合施設において調査を実施した。観察調査は、2016年9月20日に実施された敬老会に参加した全4・5歳児12人（4歳児7人・5歳児5人）と高齢者27人を対象とした。また、質問紙調査はA幼老複合施設全職員47人を対象とした。

2-2 調査期間

2016年9月20日において敬老会での交流活動の観察調査を実施し、2016年10月24日から31日において質問紙調査を実施した。

2-3 調査方法

○観察調査

敬老会での世代間交流を、ビデオカメラ（JVC、GZ-E565-R）で録画した。ビデオカメラによる記録に関しては、事前に施設長から許可を得ている。

○質問紙調査

質問紙調査は、2016年9月20日に行われた敬老会での世代間交流に関する項目と、世代間交流全般に関する項目に構成した。まず、敬老会での世代間交流に関して、i) 印象に残った出来事、ii) 幼児や高齢者に対して配慮した点、iii) 改善点や反省点を項目に設定した。次に、世代間交流全般に関して、i) 自分が考える理想的な世代間交流の在り方についての項目を設定した。また、回答はすべて記述式とした。

3 結果と考察

3-1 敬老会における観察調査

3-1-1 披露型の交流活動の様子

事例1 「歌によって引き出される動きの強弱」

保育士が「トンボのめがね」の前奏を弾き始めると、高齢者は拍や拍子に合わせて手拍子を始める。そして幼児は元気に歌い始め、高齢者は引き続き拍子や拍に合わせて手を叩いたり、上半身をゆすったり、一緒に歌ったりしている。また幼児が歌う様子を見て微笑み、隣に座っている高齢者に話しかける高齢者もいる。歌が終わり、高齢者は大きな拍手を幼児たちに送る。

続けて、保育士が「上を向いて歩こう」の前奏を演奏し始める。すると、高齢者は勢いよく手を叩きはじめる。前奏から歌う部分に入ると、幼児も高齢者も元気に歌いだす。高齢者の歌声は大きく、上半身のゆれも大きい。歌が終わると、高齢者は幼児に大きな拍手を送り、「上手やったよ」「また来てください」といった声をかける。

事例1は、幼児が練習してきた「トンボのめがね」と「上を向いて歩こう」を高齢者に披露した場面である。音楽が鳴り始めると高齢者は手拍子をしたり、上半身を揺らしたり、一緒に歌うなどしており、披露される側の動きが引き出されている。また、「トンボのめがね」と「上を向いて歩こう」では、引き出される動きに強弱が見られた。A幼老複合施設の高齢者施設では、週に3回、歌謡曲などを歌う活動を設けており、その時に「上を向いて歩こう」を歌っている。そのため、歌詞カードがない状態ではあったが、力強く歌いだすことができたのではないだろうか。加えて、「上を向いて歩こう」の曲調やテンポ間が高齢者の躍動的な動きを引き出したとも考えられる。

事例2 「Sくんの一生懸命さとJおじいちゃんの微笑み」

年長児のSくんは、大きな口を開け、大きく首を振りながら、声を張り上げるように大きな声で歌っている。しかし、「上を向いて歩こう」の特定のメロディーになるとリズムがズレ、音程もはずれてしまう。すると、高齢者から小さな笑い声と笑顔がこぼれる。またJおじいちゃんも他の高齢者と同様に、視線をSくんの方に向けて微笑む。Jおじいちゃんは、あまり子どもとかかわることに慣れていないが、敬老会では、歌っている子どもの方を見たり、時には手に持った冊子を見たりしながら、「上を向いて歩こう」を口ずさんでいる。Sくんが同じメロディーでリズムや音程を元気に外すたびに、JおじいちゃんはSくんの方に顔を向けて微笑む。Sくんはただただ一生懸命に歌い続ける。

事例2では、Sくんの一生懸命さと、それを受け止める高齢者の温かさが感じられる。Sくんは年長児としての自覚と誇りから頑張りたいという気持ちがあり、誰よりも大きな声で歌ったのではないだろうか。一方、Jおじいちゃんは、披露型の交流後に行われた手合わせによる触れ合い交流は行っておらず、子どもと積極的にかかわる方ではない。しかし、Jおじいちゃんは高齢者施設での歌謡曲などを歌う活動には積極的に参加している。つまり、Jおじいちゃんは子どもとかかわることに慣れていないため触れ合い交流は行わなかったが、歌の披露型交流においては歌を口ずさんだり微笑んだり楽しんでいたと思われる。言い換えると、歌の披露型交流だからこそ、Jおじいちゃんの笑顔や能動的に楽しむ姿を引き出したのかもしれない。Sくんの歌は上手ではなかったかもしれないが、それ以上にSくんの一生懸命さが高齢者に伝わり笑顔を引き出した。

歌を披露する活動において、高齢者は披露される側ではあるが、受け身の状態でその場にいるのではなく、幼児の歌を盛り上げるために積極的に手拍子をしたり、歌を歌ったりと、その場に能動的にかかわっていたことが確認でき

た(事例1)。加えて、子どもとのかかわりに慣れていない高齢者からも笑顔を引き出すことができていた(事例2)。つまり歌を用いることによって、その場を一緒に楽しむ雰囲気が作られた。また、歌の選曲により引き出される高齢者の動きに強弱が見られたため(事例1)、その場の一体感を高めるには、高齢者側の歌への取り組みや好みなどをふまえた選曲が重要であると考えられる。

3-1-2 手合わせによる交流活動の様子

事例3 「臨機応変なオリジナル手合わせ」

“あんたがたどこさ”の手合わせが始まる。年長児のSくんは、元気よく歌いだし、手合わせをしようとする。しかし“さ”の時に手を出さないためAおばあちゃんとタイミングが合わない。また、Aおばあちゃんも“さ”の時ではなく、違うタイミングで手を出す。そのため、SくんとAおばあちゃんは手合わせのタイミングがずれるはずだが、Sくんはそれに合わせる。Sくんが手を出せばAおばあちゃんは合わせて手を出し、Aおばあちゃんが手を出せばSくんが合わせて手を出すなど、音楽にノリながらも2人オリジナルの手合わせを行っている。手合わせが終わり、Sくんが「ありがとうございました」と言うと、Aおばあちゃんは拝むように両手を合わせ、「ありがとう」と伝える。

事例3では、“あんたがたどこさ”の“さ”の位置で幼児と高齢者が手を合わせる活動が行われた。“あんたがたどこさ”は、変拍子であるため、“さ”の位置が規則正しくない。だからこそ、“さ”の位置でお互いが手を出さなければ、バラバラの手合わせになってしまうが、SくんとAおばあちゃんは音楽の拍を感じながら臨機応変な手合わせを行っていた。つまり、SくんとAおばあちゃんはお互いの動きをよく見合い、またその動きに反応しながら即興的な手合わせを楽しんでいたことになる。

事例4 「第三者である職員の介入」

年長児のYくんは、車いすに座っているBおばあちゃんの前に行くことを促され、自ら両手を出してBおばあちゃんと握手をする。BおばあちゃんはYくんの手を握り「また～きて～ください」と声をかけると、Yくんは「はい」とだけ答える。Yくんの表情は引きつっている。他の幼児がおじいちゃんやおばあちゃんのもとに向かっている間、YくんとBおばあちゃんは向き合ったまま待ち続けなくてははいけない。その時、介護職員がBおばあちゃんの前で座り、これから行う“あんたがたどこさ”のリハーサルをするように手合わせの仕草を始める。それにつられて、Yくんも小さく手合わせの動きをしている。その後準備ができると、保育士の合図で全員が一斉に手合わせを始める。YくんとBおばあちゃんは、“さ”の位置でぴったりと手を合わせている。手合わせが終わると、職員がYくんに話しかけ、またBおばあちゃんの手を持ってYくんの頭をなでるように促す。

年長児のYくんは歌を披露している時から表情は硬く、続けて行われた手合わせの活動においても表情は硬いままであった。YくんはBおばあちゃんと向き合うことになり、どうしたらよいのか分からなかったのだろう。YくんとBおばあちゃんが向き合い、手合わせが始まるまでの間、YくんからもBおばあちゃんからも話しかけることはなかった。そこに介護施設の職員がBおばあちゃんに寄り添ったことで、安心感がもたらされ、ようやくYくんとBおばあちゃんに会話や身体の動きが生じた。幼児と高齢者が触れ合いをもつことを意図した活動ではあるが、幼児が高齢者とかわることに慣れていない時期においては、このように職員が介入する必要があるといえよう。

事例5 「高齢者の思いと幼児の思い」

Cおばあちゃんは、年中児のDくんと向き合うと「かわいいの～」といいながらDくんの腕をさすっている。手合わせが終わると、Cおばあちゃんはソファに座ったままDくんを抱っこして自分の膝にのせ、抱きかかえる。そのまま長い間D君を降ろそうとしない。その後、DくんはCおばあちゃんの膝から降りるが、Cおばあちゃんの方に向きなおり、その場にとどまる①。するとCおばあちゃんはDくんの手を握り「ヨイッヨイッヨイ」という掛け声を発しながら、手を縦に揺らし始める。Cおばあちゃんの声には勢いがあり、表情はにこやかである。職員が「もう帰るんやっ」とCおばあちゃんに伝え、D君の手をはなすように促す。DくんはCおばあちゃんの手が離れても、すぐにCおばあちゃんから離れるのではなく、Cおばあちゃんの方を見ながら少しずつその場を離れる②。

Dくんは、普段はおしゃべりが大好きな幼児だが、Cおばあちゃんに話しかけることはなく、慣れない状況に戸惑いがあったのではないかと考えられる。下線部①の場面において、DくんはCおばあちゃんの膝から降りてすぐに離れることもできたが、Cおばあちゃんの方に向き直っている。また下線部②においても、すぐに離れるのではなく、Cおばあちゃんを気にしながらその場を離れている。DくんはCおばあちゃんが自分のことをかわいがってくれていることや自分があることを喜んでくれていると感じていたからこそ、そのような行動をとったのではないかと推測される。Dくんは戸惑いながらも、Cおばあちゃんの思いや行動と向き合いながら行動していたと考えられる。

事例6 「その場に戸惑う幼児に寄り添う高齢者」

Uちゃんは、部屋に入ってから一言も発していない。“トンボのめがね”や“上を向いて歩こう”を歌っている時も、Uちゃんはずっと歌わない。“あんたがたどこさ”で手合わせをする時は、高齢者の近くに行こうとせず、部屋の真ん中

で立っている。しかし、うつむくことはなく、周りを見たりしている③。保育士は、Uちゃんに声をかけ続けるが、他の幼児もいるため、ずっと傍にすることはできない。すると、そのようなUちゃんに対して、Dおばあちゃんは「こっちに来て一緒にやろう」と言っているかのように手招いたり、手を叩いたりしている。またEおばあちゃんは、その場から動かず手合わせをしようとしないうちゃんに向かって手合わせの動きをし続ける。

Uちゃんは環境の変化に敏感な幼児であり、保育士はUちゃんの行動をある程度予測していたのではないかと考えられる。しかし、Uちゃんはおばあちゃんやおじいちゃんと触れ合う事はなかったが、うつむくこともなかった(下線部③)。つまり、Uちゃんはその場に戸惑い、高齢者の傍に行くという行動は起こせなかったが、その場を拒否していたわけでも、おばあちゃんたちの傍に行きたくなかったわけでもないかもしれない。もし、この場面でUちゃんに安心感を与えられる保育士が寄り添っていたらUちゃんの行動は変わったとも考えられる。また、2人のおばあちゃんに自分の存在を受け止めてもらえた経験が、次の交流機会に生かされる可能性もあるのではないだろうか。そのため、高齢者との交流に慣れていない幼児にとっては、寄り添う大人の存在や交流活動の継続性が必要であると考えられる。

手合わせによる交流活動では、手合わせを行う前後に高齢者は幼児に話しかけたり、頭を撫でたり、手を握ったり、抱きしめたり、呼びかけたりと主体的且つ積極的にかかわっている様子が見られた(事例3, 5, 6)。一方、高齢者とのかかわりに慣れていない幼児は、高齢者と向き合うことに戸惑いを感じている様子だったが(事例4, 5, 6)、戸惑いながらも自分に対する高齢者の思いや行動と向き合いつづける姿も見受けられた(事例5)。そのような状況においては、介護職員などの介入が幼児と高齢者に安心感を与え、さらにかかわる契機をつくる可能性が示唆された(事例4, 6)。また、戸惑いが見られた幼児だが、手合わせ場面ではわらべ歌のリズムにノリながら高齢者と息を合わせて手合わせを行う(事例3, 4)など、幼児と高齢者が共に知っているわらべうたを用いることで、あまり混乱することなく触れ合えることが確認された。

3-2 A 幼老複合施設職員に対する質問紙調査

3-2-1 敬老会における歌を用いた交流活動に関して

敬老会に参加した介護職員6人、保育士4人から回答を得た。また敬老会に関する回答を(i)印象に残った出来事、(ii)幼児や高齢者に対して配慮した点、(iii)改善点や反省点の項目ごとに表1に示す。それらを基に考察を進

める。

(i) 印象に残った出来事

敬老会にかかわった職員は、高齢者が幼児とかかわることと表情が明るくなることや、事例5のように幼児を全身でかわいがる姿が印象に残ったようである。一方、幼児に関して述べられた回答は少なく、幼児の表情が硬くなり高齢者とあまりかかわることができなかつたことが指摘された。つまり、敬老会での高齢者と幼児の様子を間近で見ていた大部分の職員は、幼児の存在が高齢者に与える影響を強く感じていたことが分かる。

(ii) 幼児や高齢者に対して配慮した点

介護職員は幼児と高齢者の仲介役を意識して担っており、また保育士は自分が高齢者と積極的にかかわることと幼児の不安を解消しようとしていたことが分かった。さらに、保育士は、幼児が高齢者に失礼な行動をとらないように気を配っていたことが読み取れる。

(iii) 改善点や反省点

介護職員2名から、“こども園の保育士は観ているだけだったが、一緒に参加されると良い”という指摘がなされた。推測するに、保育士は幼児のもつ力で高齢者とかかわってほしいという思いや幼児と高齢者の間を邪魔してはいけないという思いがあったのかもしれない。しかし、幼児の表情が硬くなってしまふなど、高齢者とかかわることに戸惑っている幼児に対しては、介護職員・保育士が幼児と高齢者を仲介することが必要であろう。また保育士は、敬老会での幼児の様子を踏まえて、普段から高齢者施設へ顔をだして簡単な交流を持つことや高齢者施設の職員との打ち合わせや連携の必要性を述べている。そのため、介護職員や保育士という枠を取り払って連携することが、幼児と高齢者のよりよい関係性の構築に寄与する可能性が示唆される。

3-2-2 世代間交流全般に関して

(i) 理想的な世代間交流のあり方

世代間交流全般に関して、介護職員(12人)、保育士(19人)、その他(7人)、計38人から回答を得た。

結果として、“日常交流”といった言葉を用いて理想的な交流のあり方を述べていた回答が、31.6%(介護5人・保育6人・その他1人)と一番多かった。次に多かったのが、“一緒にあそべること”や“一緒にできること”といったように、幼児と高齢者が共に活動する交流(28.9%、介護2人・保育6人・その他3人)であった。その中には、本調査でも用いられたわらべ歌を用いた触れ合い交流に関

表1 敬老会における歌を用いた交流活動に関する回答

<p>(i) 印象に残った出来事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の表情が明るくなり、笑顔になっていた。介護スタッフには見せない笑顔だ (介護3人・保育士1人) ・ 普段表情がない方が笑顔で子どもたちと接していた (介護2人) ・ 歌が終わった後に涙を流して喜んでいる方がいた (保育士2人) ・ 子どもたちが傍に来ると、頭を撫でたり、膝にのせたり、かわいいと言ってくれたり、かわいがってくださる (保育士3人) ・ 高齢者と子どもが手を合わせて歌うシーンでは、「ヨシッ!」と腕まくりをして準備をする入所者の方の姿も印象的だった (保育士1人) ・ 子どもはやや臆病になっていた (介護1人) ・ 歌などの発表では、元気よくできた子が、ふれあい遊びで近くに行ったときに表情がかたくなり何もできなくなってしまった (保育士1人) <p>(ii) 幼児や高齢者に対して配慮した点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者 (聴力が弱い方・認知症の方・身体が不自由な方) と子どもたちの間に入り、子どもたちが怖がらないように、楽しく触れ合えるように配慮した (介護3人) ・ 高齢者のかたを「こわい」と感じる子どももいるため、自分が親しみをもってかかわることで、子どもも安心して近づけるように配慮した (保育士・1人) ・ 子どもをあまり好きではない方がいるため、無理をさせないように配慮した (介護1人) ・ 会場が狭かったため、幼児が移動する際に気を配った (介護1人・保育士1人) ・ 歌の伴奏をする際、高齢者も口ずさめるように遅めのテンポで弾くように配慮した (保育士1人) ・ 練習中に、高齢者の方とどのように触れ合うと良いか、声はどれくらいの大きさだと良いかなど伝えた (保育士1人) ・ 気持ちが高ぶる子への関わりに気をつけた (保育士1人) <p>(iii) 改善点や反省点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者スタッフは、その場がスムーズに盛り上がるように声かけしたり動いたりしているが、こども園の保育士は観ているだけだったため、こども園の保育士も一緒に参加されると良いと思った (介護2人) ・ 普段から高齢者施設へ顔をだしたり、話したりするなど、ちょっとした交流を持つことで、敬老会でのふれあい遊びでも全員が楽しめるのではないだろうか (保育士1人) ・ 高齢者施設の職員との打ち合わせや連携をとれると良かった (保育士1人) ・ 活動内容が毎回同じになってしまうため、活動内容を新しくする必要がある (保育士1人) ・ 交流時間をもう少し長くすると良かった (保育士1人) ・ スペースがせまかったので、ふれあい遊びで全員の方に回れたか分からなかった (保育士1人) ・ 代表者に園児からのプレゼントを渡すのではなく、一人ひとり全員に手渡せるような時間と空間の確保をした方が良かった (介護1人) ・ 反省点なし (介護2人)
--

して「昔から親しまれているわらべ歌などの交流後、子どもたちはその歌を口ずさむなど印象に残っているようで、そのような機会をつくりたい」(保育1人)と述べられていた。続いて、自分たちの施設に通所している高齢者のみならず、地域の方々が交流できる居場所をつくり、様々な世代の方々が交流する形態を挙げた職員が3人(7.9%、介護1人・保育2人)いた。また本調査に用いられた交流内容である歌の披露型の交流が良いと回答した職員は1人(2.6%、その他1人)にとどまった。

総じて、歌などによる一方的である披露型交流を理想の活動に挙げる職員はほとんどおらず、日常的な自然なかかわりや幼児と高齢者が一緒に行う活動を行いたいと考えている職員が大部分であることが明らかになった。しかし、回答の中には「自由に行き来できる環境があれば良いが、現状では難しいため、行事の際に、触れ合える手遊びや、一緒にできる物づくりなどを取り入れる活動が良い」

(介護1人)という回答が見られた。そのため、まず施設間の連携を見直すことが、理想の世代間交流を実現していくことにつながると考えられる。

4 総合考察

本研究において、歌の披露型交流と手合わせによる触れ合い交流の利点と留意点が明らかになった。

まず、歌を用いての交流は、高齢者とのかかわりに慣れていない幼児や幼児とのかかわりに慣れていない高齢者にとっても無理のない交流形態であるため、幅広い対象者に用いることが可能といえる。また歌の披露型交流において、披露される側の高齢者は受け身の状態でいるわけではなく、能動的にその場にかかわる姿が確認されるなど、歌を用いることによる利点が見出せた。そのため、幼児が歌を披露する活動ではあるが、高齢者と“共に歌う”“共に歌うことができる”という点を意識しながら、より相互交

流に近づける工夫をする必要があるであろう。

次に、手合わせによる触れ合い交流は、高齢者とかかわることに慣れていない幼児でも、わらべ歌のリズムにノリながら触れ合うことがある程度可能であった。そのため、昔から受け継がれているわらべ歌は、幼児と高齢者に触れ合いをもたらす媒体となり得る。また、手合わせが行われている時のみならず、その前後において幼児と高齢者が向き合う時間を交流場面として着目する必要性が示唆された。本研究では、高齢者から積極的に幼児とかかわる様子が見受けられたが、幼児からのかかわりは見られなかった。この場面において自然に会話のやりとりが生じるように、例えば、幼児が名札を身につけたり、幼児から高齢者へメッセージカードや歌にまつわるプレゼントなどを用意したりするなどの工夫が望まれる。しかしながら、幼児から話しかけたりすることがなかったとはいえ、歌の披露型交流から手合わせによる触れ合い交流に移り、幼児が高齢者の近くに行くだけで高齢者の主体的且つ積極的なかかわりを引き出せる可能性が見出されたことは意義深い。

本研究は幼児と高齢者の世代間交流に焦点をあてて検討してきたが、調査結果を受けて、幼児と高齢者の世代間交流は職員など様々な世代もかかわる“多世代交流”の要素と機能を取り入れる必要があると考える。立松(2008)は、高齢者と子どもの交流の浅い段階では、スタッフは高齢者と子どもの仲介役として重要な役割を果たすと述べている。本研究においても、介護職員の介入により、幼児と高齢者の動きややり取りが引き出されていた。ごく自然な家族構成や地域社会のように、子どもがおり、親がおり、祖父母がおり、すべての世代が入り交ざった環境だからこそ、作られた空間ではなく自然な空間となり得るのではないだろうか。だからこそ、活動の目的は幼児と高齢者の交流ではあるが、空間に存在しているすべての人が臨機応変にかかわり合うような多世代交流を意識する必要がある。

そうすることで、高齢者に慣れていない幼児は、周りの大人と高齢者のかかわりを見たり感じたりすることができる。そしてその中で高齢者とどのように接すればよいのか感覚的に体得していくことが可能であろう。そのためにも、イベントなどによる交流活動の継続性を考えていくことが必要ではないだろうか。

「イベントによる交流も大切だが、日常的に交わることをしたい。振り返るとそこに子どもがいるような環境。高齢者の良い点、悪い点を見られる環境。昔のことやいろいろなことを伝えたり、教えたりする環境。昔々の当たり前の環境が一番良い。」(保育士)「理想は、もっと自然な形で交流になればと思う。計画した交流ではなく、子どもたちと高齢者が同じ空気を吸って、ただ笑顔で寄り添い、笑う声が聞こえるそんな場面が普通に見られると良いと思う。」(介護職員)

これは保育士と介護職員から寄せられた「理想的な交流のあり方」に関する回答である。確かに、日常的な交流が望ましい。しかし、イベントにはイベントの利点もある。その利点を最大限に生かすためには、本研究で得られた配慮すべき点や意識すべき点を活動内容や方法に反映させていく必要がある。一方、A幼老複合施設のように、認定子ども園と高齢者施設が併設するなど、世代間交流が行いやすい施設においては、施設同士の連携を取りながら、「昔々の当たり前の環境」の中でかかわりを構築していくことで世代間交流のさらなる可能性が見出される。また、日常交流とイベントを組み合わせることによって、幼児と高齢者のかかわりが促進されるかもしれない。

本研究は、A幼老複合施設における歌を用いた単発の活動を検討したが、他の活動内容や他の施設での交流を検討しておらず、比較対象がなかったことは今後の課題である。今後は、異なる活動形態での交流活動との比較研究や、歌を用いた交流活動の継続的な研究が必要であろう。

引用文献

- 村山陽 2009 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響 社会心理学研究, 25, 1-10.
- 關戸啓子 2006 全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査 川崎医療福祉学会誌, 15, 655-663.
- 下村美穂・下村一彦 2009 少子高齢社会における世代間交流の意義と課題：その②幼老合築型施設‘みどりの福祉会’のアンケート調査を通して 山形短期大学紀要, 41, 179-193.
- 菅谷泰行 2014 老人福祉施設における世代間交流に関する実態調査報告：近畿2府4県でのアンケート結果の分析 介護福祉学, 21, 122-129.
- 立松麻衣子 2008 高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策：高齢者と地域の相互関

- 係の構築に関する研究 日本家政学会誌, 59, 503-515.
- 上村眞生・岡花祈一郎・若林紀乃・松井剛太・七木田敦 2007 世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究 幼年教育研究年報, 29, 65-71.

謝辞

本調査にご協力いただきましたA幼老複合施設の施設長をはじめとする職員の皆さま、そして、いつもはじける笑顔で迎えてくれる子どもたちと包み込むような温かさで接して下さる高齢者の方々に深謝申し上げます。